The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「新しい女」をめざして : 羅蕙錫と平塚らいてうとの比較を中心に
Author(s)	金, 華榮
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2003, 37, p. 83-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47885
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「新しい女」をめざして
――羅蕙錫（ナヘソク）と平塚らいてうとの比較を中心に――

金　華榮

1．はじめに

朝鮮末期、外国による開港とともに始まった近代化は、儒教的家父長制の下に置かれていた女性たちにも影響を及ぼした。その一つの経路となったのが教育であり、新式教育を受けた女性の中から「新女性」という一群が生まれ始めた。

朝鮮の「近代」には植民地支配下で始まったという特殊な性格があり、当時の知識人たちの「新女性」への期待が「民族自立」と「女性解放」という二つの希望に繋がっていた事実は見逃せない。さらに1920年後半になると、彼女たちは伝統的家族制度に対する反発として、自由恋愛・結婚を主張し、女性解放を試みる。

羅蕙錫はそのような「新女性」の代表とされる人物である。彼女は1896年にソウル近郊の水原で生まれた。1913年には日本の私立女子美術大学に留学し、朝鮮人女性としては始めて西洋画を勉強した。帰国後は、弁護士であり日本の政府官僚でもあった夫の金雨英とともに中国東北地方や欧米各国をめぐり、その見聞や思想を書き残している。

ところで羅蕙錫が留学した当時の日本では、女性だけの手になる雑誌『青鞜』が創刊され、さらに演劇界や雑誌でも「新しい女」が取り上げられるなど、女性解放の雰囲気が漂っていた。羅蕙錫の「理想的な婦人」からは、

彼女が「新女性」として自己形成してゆく過程で、当時の日本の状況に深い影響を受けていたことが窺われる。

そこで本稿では、羅蕙錫の日本滞在時期（1913～18、1920）に焦点を絞り、彼女と日本の「新しい女」との接点を詳細に考察してみたい。とくに上述の「理想的な婦人」で取り上げられている平塚らいてうは、彼女と「新しい女」の関わりを示唆する手がかりになると思われる。従来の研究においても、羅蕙錫が平塚らいてうから影響を受けていたことは指摘されている[1)]。とはいえ、その具体的な検証はいまだ詳細には行われてこなかった。ここでは、主に「理想的な婦人」を中心に分析し、平塚らいてうの文章との比較を試みることにする。

2. 羅蕙錫と理想的な婦人

『学之光』は、1914年から30年まで、東京の朝鮮人留学生たちによって運営されていた雑誌である。羅蕙錫は1914年12月、同誌に「理想的な婦人」を発表し、続いて「雑感」を1917年３月に、「雑感 ── K姉さんへ」を７月の同誌に寄せている。

「理想的な婦人」は、儒教的家父長制を強いられていた朝鮮の女性に対して自我の自覚を促す、近代的女性解放論である[2)]。彼女はこの三つの文章で、前近代的女性観を批判するとともに、自分が理想とする女性像について提起している。

では、彼女のいう「理想的な婦人」とは何だったのだろうか。

羅蕙錫は、論の冒頭において、一般にいうところの理想とは「欲望の思想」であり「感情的な理想」であるのに対し、彼女が志向する理想とは「霊知的な理想」であると述べている。このような「霊知的な理想」に近い女性が「理想的な婦人」だというのである。

彼女によれば、「習慣的」で「世俗的」な道徳は「理想」とすることがで

きないと言う。例えば、一般に婦徳の理想とされている「良妻賢母」と「温良柔順」とは、男性教育家が女性を奴隷とするために作り出した理想であり、女性はそのような理想の下で教育されてきた結果、あまりに温良柔順すぎて理非の区別さえつかないようになってしまったという。最近の研究によれば、「良妻賢母」というイデオロギーは、儒教的な婦徳にかわり「近代」女性の抑圧装置として用いられるようになった思想であり、植民地朝鮮の場合はさらに、植民地主義的なイデオロギーとも絡み合いながら浸透していったことが明らかになっている[3)]。

では羅蕙錫は、いかにすれば「理想的な婦人」になることができると考えていたのだろうか。

> 無論、知識と枝芸が必要である。いかなることがあっても、常識でものごとを処理できる実力がなければいけないと思う。一定の目的をもって有意義に自分の個性を発揮しようという自覚がある婦人になり、現代を理解する思想と知識および人格において時代の先駆けになって、実力と権力を持ち、神秘的・内的な光明をもつ理想的な婦人にならなければならない。(「理想的な婦人」『羅蕙錫全集』p. 183)[4)]

すなわち「理想的な婦人」とは、明確な目的があり、個性を持ち、自我を自覚した婦人ということになる。さらに「理想的な婦人」は、時代の先駆者としての自覚を持ち、いかなる時にも「知識と技芸」という実力を持たなければばらないとされている。なお後に書かれた「雑感」によれば[5)]、ここでいう「知識と技芸」とは、哲学や科学・芸術など、西洋の新しい知識を意味していた。

さて「雑感」では「今朝鮮の女性も人間にならなければならない」とされている。ここでは、女性も人間であるという自覚とともに、「朝鮮の」女性であるという自覚が促されているのであり、「民族的な自我」[6)]の目覚め

が訴えられているといえよう。さらに同年7月の「雑感 ── K姉さんに」[7]では、朝鮮の女性に対して三つの欲求を持つことが主張された。その三つとは、まず女性も人間になろうとする欲求であり、女性も男性と同様な権利と自覚をもち、自ら朝鮮人と朝鮮の女性としていかになすべきかを考えることを促した。第二に挙げられているのは、自分のものにするという欲求である。日本が西洋文化を受け入れ近代化した根底には「大和魂」という精神があると指摘し、朝鮮も日本のように西洋の「近代」を受け入れ、「朝鮮化」することを主張した。最後に挙げられているのは活動する欲求であり、先進知識を身につけ、失敗を恐れず一歩ずつ進んで行くことを勧めている。

1913年に日本に渡った羅蕙錫が目にしたのは、「近代化」した日本だった。孫知延氏が植民地朝鮮における雑誌『新女子』の言説から民族イデオロギーを指摘したとおり、「憧憬の対象としての他者の発見」と、「自分がその他者とは異なる民族であるという認識」が羅蕙錫にも芽生えていたと言える[8]。とはいえ、「日本の『大和魂』とは何か？　日本は他国の文化を受け入れ日本化したように、朝鮮民族も『もの』を朝鮮化しようとする欲求を持たなければなりません」という言葉から窺われるように、羅蕙錫の議論には、朝鮮民族への自覚を促すために、「大和魂」という植民地主義イデオロギーを利用するという矛盾が生じていた。

3.　「理想的な婦人」と「平塚らいてう」

次に羅蕙錫と日本との関わりを、平塚らいてうの文章を通じて考えていきたい。羅蕙錫は「理想的な婦人」において、最も彼女の理想に近い婦人として六人の例を提示し、その一人として平塚らいてうを取り上げている。

革新を理想としたカチューシャ、利己を理想と思ったマグダ、真の恋

愛を理想としたノラ夫人、宗教的な平等主義を理想としたストー夫人、天才を理想としたらいてう女史、円満な家庭を理想とした与謝野女史など多方面で理想を持って活動する夫人は現在にも少なくない。(p. 183)

上記の人物の中で、カチューシャ、マグダ、ノラは、それぞれ小説『復活』(トルストイ作、1896)、戯曲『故郷』(ズーデルマン作、1893)、戯曲『人形の家』(イプセン作、1879) の女主人公であり、これらが洋の東西を問わず「自我の覚醒」と「女性解放」という問題に対する社会的関心の契機となったことはよく知られていよう。これら三つの作品は、羅蕙錫が留学していた当時の日本でも演劇として上演されており、大きな反響を呼んでいた。例えば羅蕙錫は、松井須磨子主演の「カチューシャ」を見ている[9]。日本において三人の主人公が「新しい女」の代表的な存在として言われていたことは重要である。また、平塚らいてうと与謝野晶子は自ら女性解放論を書いており、彼女らも「新しい女」と言われていた。盧英姫氏の指摘[10]のように、このような当時の日本の状況は、羅蕙錫が「新しい女」に多大な関心を寄せ、自身も「新しい女」として自我を確立していく上で重要な契機になったと見ることができる。

さて上に引いた文章の中で、羅蕙錫が平塚らいてうを「天才を理想とする」婦人だとしているのは、『青鞜』の創刊辞としてらいてうが書いた「元始、女性は太陽であった」(以下、「元始」と略す) を羅蕙錫が目にしていたことを示唆する。以下では、「元始」の文章をやや詳しく検討することによって、羅蕙錫とらいてうとの関係を考えてみよう。

らいてうは、羅蕙錫より10歳上で、日本女子大学の在学中、森田草平との心中事件をきっかけに世間から注目を集めていた。そうした世間の批判にも屈せず再起し、1911年9月には雑誌『青鞜』の創刊を手掛けた。らい

てうがその創刊の辞として寄せた「元始」では、男性に隷属する女性の社会的・政治的な自由解放を訴えており、また女性自身の「内的革命」を促している。続いて1913年１月の『中央公論』では、自ら「私は新しい女である」と宣言した。次に引くのは「元始」の一部である。

> 元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。
> 今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く病人のような蒼白い顔の月である。
> 私どもは隠れてしまった我が太陽を取戻さねばならぬ。
> 「隠れたる我が太陽を、潜める天才を発現せよ。」こは私どもの内に向って不断の叫声、押さえがたく消えがたき渇望、いっさいの雑多な部分的本能の統一せられたる最終の全人格の唯一本能である。
> この叫声、この渇望、この最終本能こそ烈熱なる精神集注とはなるのだ。
> そしてその極るところ、そこに天才の高き王座は輝く。(「元始女性は太陽であった ――『青鞜』発刊に際して」、『平塚らいてう著作集　第１巻』(以下、著作集と略す) 大月書店、1983年。p. 18)

らいてうによれば、太陽は生命の根源を表す象徴であり、精神集注はその生命の根源ないし自我の実体に到達する人間の偉大な能力であり、人間の内に潜んでいる無限の能力を引き出す方法であった。にもかかわらず、長い歴史の中で日本の女性は家父長制の下でその精神集注力を失い、現在のような「独立心のない無気力な」存在になったと批判し、そこで女性は、自我に目覚め、その集注力を取り戻し、政治的、社会的、経済的な自由と独立を獲得するための「内的革命」を遂行することが必要だとしたのである[11]。

らいてうによれば、そのような精神集注こそが「神秘」に通じる唯一の

門だと言う。自分の主体的自覚・自我に覚醒し、精神集注力を取り戻した者こそが「絶対の光明」を持つ「天才」として太陽に到達することができるのであり、いいかえれば、「天才とは神秘そのもの」であり「真正の人」なのであった。

このようにらいてうは、「天才」という言葉を「新しい女」の到達点として強調しているのであるが、ここで、羅蕙錫がらいてうを「天才を理想とした」と評していたことを想起すれば、羅蕙錫が「元始」を目にしていたことは誤りない。さらに羅蕙錫の「理想的な婦人」では、先述のように、明確な目的意識を持ち、現代を生きていく「実力と権力を持ち、神秘的で内的な光明をもつ理想的な婦人」こそが理想的な婦人だとしている。この「神秘的で、内的な光明をもつ」女性という羅蕙錫の言葉も、上に検討したらいてうの「元始」からの影響関係を十分に示唆しているということができよう。

4. ノラと「新しい女」
――『人形の家』への見解をめぐるらいてうとの比較

羅蕙錫は「理想的な婦人」の中で『人形の家』の「ノラ」を取り上げているのは先述の通りである。本稿の最後に、羅蕙錫がこの『人形の家』をどう見ていたのかについて考えてみたい。このノラは日本においても「新しい女」の象徴として取り上げられており、平塚らいてうも「ノラ氏へ」という文章を発表している。羅蕙錫のノラ観を検討することで、羅蕙錫とらいてうとの関係についてもさらに深く考察することができるであろう。

①羅蕙錫とノラ

韓国においてイプセンは、1920年代から1930年代の間に盛んに受容され、理論研究、戯曲翻訳、公演活動など様々な方面で活発に受け入れられた。

イプセンの作品が韓国の女性解放運動を発生させたり主導したりしたとまでは言えないが、女性運動の促進剤や知的な源泉になったことは事実である。特に、『人形の家』が当時の韓国の社会に与えた衝撃は大きかった[12)]。

翻訳は梁白華（ヤンベクァ）が1921年1月25日から4月2日にかけて『毎日申報』に発表し、翌年『ノラ』という題名で刊行した。この翻訳は『新女子』社による上演のため訳されたもので、英語訳から島村抱月と高安郊月が和訳したものを更に重訳したものであった。しかしこの上演は結局中止となり、4年後の1925年、玄哲（ヒョンチョル）の手によって設立された朝鮮俳優学校による『人形の家』が朝鮮での初演となった。梁白華は「『人形の家』について」という評論で、『人形の家』は「婦人問題が材料になっていて、婦人の解放、婦人の独立、婦人の自覚、男女平等、個人の結婚恋愛を基礎とした婚姻などの問題を含めているため、単に劇が芸術の力以外に広く世間を刺激した事実は否定できない」[13)]と述べている。ここから『人形の家』が近代朝鮮の女性解放運動に深い影響を与えたことが窺われる。

羅蕙錫は「理想的な婦人」で、ノラを「真の恋愛を理想とする婦人」と評価している。羅蕙錫は「真の恋愛」をどのようなものと考えていたのだろうか。それは男女の「肉体的・霊的結合」[14)]を意味し、自我が溶け込んでいる愛情というものであった。言いかえれば、自分の自覚によって相手を選び、相互理解の上で結婚する、いわばロマンティックラブとも言うべきものであった。前近代社会では両親が選んだ人と結婚するのが当然視されていたが、19世紀末からの文明開化によって男女平等思想が普及し、自ら相手を選択する自由恋愛・自由結婚は新しい家族制度として受け入れられていく。しかし、1910－20年代にはまだ両親による強制結婚が広く行われ、愛情もない結婚生活を強いられる人たちが多かった。羅蕙錫にも父親が結婚を強要したために一時退学を余儀なくされるという経歴があった。当時の朝鮮の知識人が、愛情のない結婚に反発する女性主人公ノラに対して覚

える共感には、このような時代の背景があった。

さて羅蕙錫は、梁白華の『人形の家』の翻訳に続き、1921年4月3日の『毎日申報』に「人形の家」と題した歌を発表した。

> 私が人形遊びをするとき／よろこぶように／父の娘という人形のように／夫の妻という人形のように／彼らを喜ばせる／慰め物になる（中略）夫と子供に対する／義務のように／私には神聖たる義務あり／私を人間にする使命の道を踏み出し／人間となる（中略）ああ、愛する少女たちよ／私を見なさい／誠意をこめて身をささげなさい／淡い暗黒を横行していても／ある日、暴雨の後に／人間はあなたと私（引用の傍線は筆者による。以下同様。）

ここで羅蕙錫は、家父長制の下に人形化された朝鮮の女性を指摘し、女性も「人間である」という自覚を詠っている。この詩は羅蕙錫が結婚した後に書いた詩であり、1914年の「理想的な婦人」に比べ、イプセンの『人形の家』という作品とより積極的に向き合っているのがみえる。ところで、傍線の「夫と子供に対する義務のように」「私には神聖たる義務」があるという箇所には、女性の主体性の獲得を主張するあまり、男女平等という対等な立場での義務ではあるが、「妻」「母」という性役割分業を肯定しているという側面が窺える。

また、詩の最後に、イプセンの『人形の家』においてノラの自我の覚醒を促進する役割を持つリンネ夫人の影が落ちていることに注目したい。クログスタントからノラへの脅迫が取り下げられたのを聞いたリンネは、ノラとヘルメル二人はまだお互いに「理解しあう」夫婦関係ではないと指摘し、取り下げを留保するようにという。このような事件によって、最後にノラは夫の偽善を知ることになり、「真の人間」としての自覚に到ることになるのだ。

このように『人形の家』では、リンネ夫人とノラという二人の女性の姉妹愛的な関係がノラを真の人間に為し、ひいては男性に自我の自覚を促している。このような女性たちの姉妹愛的な関係は詩の最後の部分と符合している。羅蕙錫の詩は一個の自我の覚醒から女性全体への自覚へと広がっていくことを促しており、これはまさにイプセンの『人形の家』の主題に即するものであるということができよう。

②らいてうとノラ

では、らいてうは『人形の家』をどのように受け止めていたのだろうか。

日本での『人形の家』の初演は、『青鞜』創刊と同年の1911年９年に坪内逍遙の文芸協会が私演を行い、11月に帝国劇場で上演された。訳は1910年１月に『早稲田文学』に掲載された島村抱月の訳による。韓国の梁白華訳に比べれば11年も早く、梁の訳がこの島村訳からの重訳だったのは先述の通りである。逍遙は1910年に早稲田講演において「近世劇に見えたる新しき女」と題して、イプセンの諸作品を論じている。翌年逍遙の講演と公演により、世間の莫大な反響を引き起こしており、主人公ノラは「新しい女」のシンボルになった。

日本女子大時代、らいてうは桑木厳翼の「イプセンのノラの就きて」を読んで感動を抱き、日本語訳の『人形の家』を読んだ。後に彼女は帝国劇場で松井須磨子が演じたノラを観劇している。この上演を受けて『青鞜』は1912年１月号に『人形の家』特集を組み、らいてうはHという筆名でノラあての手紙の形式をとった「ノラ氏へ」を書いた。

らいてうはノラの家出を本能的で「盲目的」な行為であり、十四、五歳の子供のような幼稚な仕業だと厳しく叱咤する。それから、良人のために秘密を負ったことに関しては「真に可憐な」ことであるが、「自分の愛に対する応報を夫に求め」ることは自身の不明と「乞食根性」であると言い、

それを「恥じてください」とノラを批判する。当時の「ノラ」論には、ノラに同情を寄せ、その自我の覚醒に共感を覚える論調が多かったが、らいてうはそうではなかったのである。

らいてうはノラに「まだあなたは人間になったのではありません。何でも人間にならねばならぬ、とやっと気づかれただけです」と言い、ノラの夫も「人為的な法則」に支配されていた人形だったのに、ノラはそれを気づいていないと批判している。らいてうはノラの物語を女性の問題であると同時に男性の問題であるとも捉えていたといえる。つまりらいてうは、『人形の家』について、女性解放という狭小的視覚を離れ、人間自体の真の解放を論じた作品として捉えようとしていたといえる。

ではらいてうは、真の人間になるための方法をどのように考えていたのだろうか。

> ノラさん、あなたがほんとに自覚なさるのはこれからです。あなたの行手には第二の悲劇がまっています。それは虚幻の自己を捨てる悲劇で、かつて御良人や、お子さんをお捨てになった時の様な華やかなものではなく、もつと悲惨な、深刻な、沈痛な、個人としてあなたの内部御心の奥底から湧いてくる心霊問題です。かつては夢にも御存じなかった自己心霊上の悲劇にお出逢いになります。(『著作集　第1巻』p. 83)

真の人間になるためには「虚偽の、幻影の自分」に隠れている真の自分に向き合うことが必要であるという。これからの大きな試練を乗り越え、真の自分を自覚する時、「真の意味で心の底からの新しい女」になれるとらいてうは主張している。

らいてうと羅蕙錫はいずれも、ノラの自覚に注意を払いながら、「新しい女」としての希望を抱いていた。しかし、ノラの「家出」という象徴的な

行為については、羅蕙錫は「家」という儒教的家父長制から勇敢に抜け出す、自覚ある行動として受け止めているのに反して、らいてうは重要なことは行動でなく、「心霊」の解放であることを強調している。そしてらいてうは、自我の覚醒は女性だけに留まる問題ではなく、男性も含めた人間全体の問題なのだと主張した。一方で先に引いた羅蕙錫の詩では、一見女性解放だけに目がとどまっているようにも思われる。ただし「理想的な婦人」から読み取れるとおり、男女平等下の「恋愛」は男女全てを想定したものであり、こうした羅蕙錫の見解はらいてうのノラ論に相通じる部分もあるといえよう。

5. おわりに

以上、考察したように、植民地朝鮮の「近代化」において、女性解放という問題は、「民族の自立」の問題とも絡んでいた。たとえば、新教育を受けている「新女性」には、朝鮮の男女が対等に実力を培養して、男性とともに民族の独立を支えるはずであるという期待がかけられていた。

羅蕙錫は日本の留学時期に体験した「新しい女」を自分の立場から見なおし、そのような女性が朝鮮にもあらわれることを力説していた。例えば、「理想的な婦人」や「人形の家」において前近代的家父長制に反発し、女性も「人間である」という自覚を促した。このような見解はらいてうの「元始」とイプセンの『人形の家』の両方に相通じている。

一方で彼女は留学を通じて、「日本」という他者に出会い、自分がその他者と異なる「朝鮮人」であることにも目覚めていった。つまり羅蕙錫の自覚の過程には、「女性である」という「性」のアイデンティティーの自覚と「朝鮮の女性」という民族的自我の自覚が並行していたと言えよう。

注

1)　※盧英姫「羅蕙錫、その『理想的な婦人』の夢 ── 東京留学体験と日本の新しい女との出会いを中心として」『翰林日本学研究』第2輯、1997年など。※韓国語文献の表題は冒頭に※を付して日本語文献と区別した。

2)　※李相瓊『人間として生きたい』ハンギル社、2001年（初版2000年）、p. 79。

3)　※洪良姫『日帝時期朝鮮の「賢母良妻」女性観の研究』漢陽大学校大学院碩士（修士）論文、1997年、未刊行。

4)　羅蕙錫の本文の引用は『羅蕙錫全集』テハクサ、2000年による。以下『全集』と略する。なお、羅蕙錫の文章原文は韓国語であり、引用文は筆者において日本語訳したものである。以下同様。「理想的な婦人」の初出は『学之光』（1914年、12月）による。

5)　※「雑感」『全集』p. 187、初出『学之光』1917年3月。

6)　※盧英姫「近代朝鮮女性の民族的自我形成に関する研究 ── 羅蕙錫の近代日本との出会いを通じて感じた民族的自覚を中心に ──」『比較文学』別巻、1998年、p. 268。

7)　※「雑感 ── K姉さんに」『全集』pp. 194-195、初出『学之光』1917年7月。

8)　孫知延「民族と女性、ゆらぐ<新しい女>── 植民地朝鮮における雑誌『新女子』を中心に」『日本文学』2000年5月号。

9)　※「1年ぶりにみた京城の雑感」『全集』p. 261、初出『開闢』1924年7月。

10)　注6)の盧英姫氏、前掲論文。

11)　平塚らいてう『元始、女性は太陽であった』上、大月書店、1975年（初版1971年）、pp. 335-336。

12)　詳しくは、※高勝吉「韓国新演劇に及ぼしたヘンリック・イプセンの影響」『中央大学校論文集』第27輯、1983年。

13)　※梁白華「『人形の家』について」『毎日申報』1921年4月6日。

14)　※「雑感 ── K姉さんへ」『全集』p. 192。

参考文献

島村抱月『人形の家』天佑社1920年
女性史総合研究会編『日本女性生活史　第4巻近代』東京大学出版1990年
張競『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店1995
姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店、1997年（初版1996年）

中村都史子『日本のイプセン現象』九州大学、1997年
新・フェミニズム批評の会編『「青鞜」を読む』學藝書林、1998年
小林登美枝『平塚らいてう』清水書院、2001年（初版1983年）
牟田和恵・慎芝苑「近代のセクシュアリティの創造と「新しい女」── 比較分析の試み ──」（『思想』886号、1998年4月）
井上和枝「1920－30年代の朝鮮社会と『新女性』の恋愛・結婚」（『比較家族史研究』15、2001年3月）
橋本堯「大和魂の成立 ── 自尊と他卑」（『「国民」形成における統合と隔離』、日本経済評論社、2002年）

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

Forming the "New Woman"
— A comparison of Ra Hye-Suk and Hiratsuka Raichou —

KIM Hwa-Young

At the end of the Chosen Period, the effect of the modernization which started together with the opening of the country by foreign powers, was felt by many women who had lived their lives under a Confucian patriarchal system. One of the paths this effect took was through education, and from among the group of women who received this new form of education was born the "New Woman."

There is a particular type of thinking which began in this "modern" Korea under colonial rule, and it is clear that the expectations which the intellectuals of the time held of the "New Woman" were twofold: "Racial Independence" and "Female Liberation." Furthermore, in the late 1920's, in resistance to the traditional family value system, these women attempted liberation through freedom of choice in love and marriage.

Ra Hye-Suk is a representative figure of this type of "New Woman." She studied in Japan at *the Private Women's School of Fine Arts*, and was the first female Korean to study Western Art. After returning to Korea, she travelled further with her husband, who was both a lawyer and a bureaucrat, to Canton in China and around various Western countries, leaving us a written record of her thoughts and experiences.

Also, the time when Ra Hye-Suk was a student in Japan, was the time of *Sei Toh* (Blue Stockings), a magazine published solely by women, and a time when the "New Woman" was the subject of magazines and the theatre world. An atmosphere of female liberation was generally *en vogue*. From Ra Hye-Suk's *"Isangjoegin Buin"* (The Ideal Wife) we can see the course of the formation of her "New Woman" and the great influence that Japan of the day exerted on her.

In this study, I have concentrated on Ra Hye-Suk's period of residence in Japan (1913~18, 1920) and the link between her and the Japanese "New Woman." She was greatly pulled toward Hiratsuka

Raichou, and it was through Raichou's writings that she embraced her own wish to be a "New Woman." However, Ra Hye-Suk's writing on women can indeed be said to balance her realisation of her own gender identity "as a woman" and her racial identity "as a Korean woman."

キーワード：近代　女性　新しい女　羅蕙錫　平塚らいてう